野村生涯教育だより

No. 438

（公財）野村生涯教育センターの
シンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、
基本理念「自然観＝Nature」の
頭文字を表している。

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

もくじ

● 令和 5 年度 野村生涯教育講座開講
● 幼児教育部第 46 期修了式
● 学ぶよろこび
● 訃報　デニス・ロートン教授

野のシロツメクサ

令和五年度 野村生涯教育講座開講

本年度「野村生涯教育講座」は、四月、本部定例講座をはじめとして全国三十二箇所で開講した。

四月十一日（火）、十二日（水）、全講座に先立ち、本部及び各支部・連絡所のリーダー研修生二一五名が受講する全国講座が開講した（全二十拠点のオンライン形式）。

初日の開講式では、佐野美智代研修・地域担当が「新型ウイルス、ロシア・ウクライナ問題、自然災害など、今、厳しい社会を私たちは生きている現実に心を据え、あらゆる事象を人間成長の課題として自己を探求し『野村生涯教育論』のもとに人間性復活を目的に真摯に学びたい」と挨拶した。

二日にわたり、野村生涯教育論「第一章 生涯教育への道程」のテーマのもと、吉岡由美岡山支部責任者、伊藤正子研修・地域担当、そして金子由美子理事長が講義に立った。二日目の午後には地域討議の時間を設け、最後に金子理事長が質疑応答、まとめを行った。

二日目午前中、金子理事長は講義の冒頭、四月一日の公益財団法人設立記念日（財団設立四十二周年）に木村英世理事が挨拶の中で、二〇〇三年の財団設立記念日における創設者 野村佳子初代理事長の言葉に触れたことから、その記事が掲載された機関紙二一六号を改めて読み、心を動かされたと話し、次のように続けた。

「二十年前、亡くなる直前の財団設立記念日に、創設者は私たちに草創期の精神が失われているとおっしゃり『この活動の精神には、自分たちの利益のために他におもねるとか、他を利用することがあってはならないと思うのです。私は今日まで一貫して、その精神で通してきました（略）一人ひとりがそれを受け継ぎ、それをまた次の世代へと伝えていかなければ、精神は失われ、活動の意味はなくなります。時代が悪くなったと言いますが、私はそれは人間が悪くなったのだと思うのです（略）だからこそ、一人ひとりが自分の意識にメスを入れる、自己を省みることが大事だと思うのです。それを常日頃から学んでいるはずなのですが、実際に人と相対すると、すべて悪いのは相手、自分は常に正しいと思っている。それでは衝突しかないですものね。それがまさに今の社会であり、その社会を直すためにやっているのに、自分がそれをやっていることに気がつかなければだめだと思うのです』と、記念日の反省にしたいとお話しくださいました。

また、創設者の言葉に『とかく組織が大きくなったり、活動が広がったり、揃うものが揃ってくると本質が失われがちになります』とあります。

創立から六十年を経て、ますます草創期の精神、この活動の本質が失われていっているのではないか、と私は危惧の念を抱いています。諸先輩方のようなひたすらに社会を思い、人さまを思い、私がやらなければ、といった気持ちが影を潜め、できるか、できないかばかりに考えがいく。自分がやらなくとも誰かがやってくれる、何とかなる、と無自覚に思っているような姿勢が垣間見えます。自分から半径一メートルの狭い世界では何とかなると思うのかもしれませんが、実存の世界は違います。足もとの問題から日本社会の抱える問題、国際社会の直面する課題に至るまで、私たちはますます厳しい状況を生み出しています。

ここに、創設者が第一章六番目の項目に説いた〝時代認識と自己認識〟の重要性を、私は今の、現代という時代背景において学ぶ必要があると思います」と金子理事長は語り、創設者が一九六〇年代という時代背景のなかで得た動機から、教育の原点、人間の原点に遡り、本質に立ち返って説いた「第一章 生涯教育への道程」を、ロシアのウクライナ侵攻によりその存在意義が問わ

れている国際連合の問題、高度ＡＩ技術開発の可能性と人間精神への影響などを示し、現代という文脈における〝時代認識と自己認識〟の重要性を捉え、講義を行った。

二日間の講座後、受講生から多くの感想が寄せられた。

九十代（東京）　改めて「今」という時代と、そこに生を受けている「私」について思いを深めました。これから世界を席巻していくであろうＡＩ時代に向け、なんとしてもエゴを克服し、精神性を高め、人間らしくなっていかなければ、と思う。

六十代（愛知）　できる、できないばかりになってはいないかと問われ、真剣に取り組んでいないと思った。精神を耕すこと、心を動かし、開発していくことこそ、野村センターで学ぶ意味であると思いました。

六十代（茨城）　時代認識と自己認識のところで「実は火がついているのに気づかずにいる。学んでいても今の時代を受け止めていない」と理事長が講義されたことが心に残った。「時代を受け止める」とはどういうことか、よく考えてみたい。

土曜講座は、四月二十二日（土）、当センター第二研修会館を会場に、三十名が出席して開講した。

開講にあたり講座責任者の板井秀子研修・地域担当が挨拶を述べた。そして「野村生涯教育センターのあゆみ」のビデオ上映に続き、野村生涯教育論「第一章」の講義を、高野まり講座副責任者、澤村智子茨城連絡所責任者が行った。

午後は講義を踏まえた全体討議が持たれ、「ニュースや情報を聞くと不安に思う。少子化の問題は昨年度の出生数が過去最少の約八十万人、自分の世代と比べ四、五十万人減っている。日本の将来は大丈夫かと心配になる。高齢者として考えながら進んでいかねばならない。もっと若い人に目を向けていかないと日本の未来が心配だ」と発言した受講生に、板井責任者は「今日、時代認識と自己認識の重要性を学んだが、私たちは時代に関心が薄い。時代と自分は連動し、私たちが作った社会であると学ぶ。だからこそ自分の意識を吟味し、人間とは何か、人間は本来どうあるかを学び、そこからどうあるべきかを考える。地球温暖化や戦争など世界は悪化の方向へ向かっている。その原因を自己に見出し、生きる責任を果たしていく、その生き方を一年を通して学んでいきたい」と応え、一日を締め括った。

愛知連絡所は、四月二十二日（土）、豊橋市民センターを会場に、十二名の参加を得て開講した。

はじめに秋田明子副責任者が開講の挨拶を述べ「あゆみ」のビデオを上映した。その後、野村生涯教育論「第一章」の講義を船井幸代副責任者、東純子責任者が行った。

講義を受けての全体討議では、受講生から「障碍者の自立支援を行う会社で働く長女が、会社から将来困ったときのために地域の自立支援センターを利用し、繋がりを持っていた方がいいと言われ不安になり悩んでいる。夫は困ったその時に考えればいいと言うが、私たち両親が先にいなくなることを考えると私自身が不安になる。今日学んだ〝精神的自立〟とはどういうことか」と質問が出された。それに対し他の受講生から「条件に制せられることなく、主体的に生きることが精神的自立だと思う。私たちはそのために学んでいると思う」「自立と言っても一人で生きることではない。皆、助け合いながら生きている」「長女さんは講座で学び始めてから自分の気持ちや意志を出せるようになり、成長していると思う」といった発言があり、先ず長女の気持ちをよく聞きわかろうとすること、夫の思い、考えをわかる努力をしてよく話し合うことが課題だと話し合った。

今の時代を生きる責任として、自分が人間としてどうあるか、主体的に生きることが如何に大切かを実感する講座となった。

幼児教育部
第四十六期修了式

三月二十八日（火）、例年より早く咲き始めた桜が満開の中、幼児教育部第四十六期修了式が当センター第二研修会館で行われた。今期修了生は、羽田野薫さん（千葉）、十文字碧さん（東京）の二名。

新型コロナウイルス感染症に関わる制限が緩和され、本部、東京近県支部のメンバー総勢八十八名が見守る中、芸術教育部のバイオリン演奏にのって緊張した面持ちの修了生が入場した。

はじめに幼児部前責任者の生形由紀さんが「創設者が個人の生涯を規定する最も基礎となる時期であると説いた大切な幼児期を親子で通い〝子どもたちの教育はいついかなる場合にも親の自己教育である〟のモットーのもとに共に学んできました。今日の二人の立派な姿に、とても感慨深い思いです」と挨拶を述べた。

まず金子理事長から、修了生に修了証書、記念品が手渡された。

続いて理事長は「第四十六期修了生、そしてご両親、ご家族の皆さま誠におめでとうございます。

三年前から新型ウイルスが拡大し始め日常生活が一変し、それまでのルーティンや踏襲だけでは通れなくなりました。そして特に学生生活や新入社員の方たちが可哀そうだということが度々報じられ、私も本当にそのように思います。しかし、この学びを通して本当に可哀そうだけなのかと思います。今、コロナウイルスの他にも、社会、世界は温暖化問題、ロシアによるウクライナ侵攻、地震や自然災害、また北朝鮮の頻繁なミサイル発射といった隣国との問題に直面している。

こうした困難な時代を子どもたちは生きていくのですから、まず親や大人たちが明るい未来を創る意識になり、逞しくならなければならないと思います。そして生きるとはどういうことなのかを考える。生きるとは自らに内在する可能性を十全に啓き出すことだと学びます。生きていれば多くの困難にぶつかることは常ですが、その度に全力でそのことと向き合い、知恵や、生きる力を引き出していくことが生きることだと思います。

今、とても困難な時代だからこそ、自らの内在する可能性を引き出せるチャンスでもある時代とも言えるのです。全力でこの時代を生き抜くために、まず親世代、そして祖父母世代の私たちが困難から知恵を引き出す教育を自らに行い、未来を担う子どもたちの道標になれるよう、共に自己教育をしてまいりたいと存じます」と『お祝いのことば』を贈った。

また『送ることば』として幼児部副責任者の村岡智子さんから、修了生、そしてその親たちと共に悩み、真剣に向き合いながら学んできた心温まるエピソードが語られ、修了生の家族からは「人生のなかで重要な時期である幼児期を、こんなに愛情深く皆さまから育てていただいたことを、改めて今日感じさせていただきました」とお礼のことばが述べられた。

最後に、幼児教育部の小田美奈さんが、修了生と共に過ごした貴重な日々への感謝を『終わりのことば』として述べた。

修了生は参列者の温かい拍手とバイオリン演奏に見送られ、幼児教育部を巣立った。

学ぶよろこび

岡山支部　小田美奈

長年岡山支部で学んでいた母に私はよく仕事の悩みを聞いてもらっていました。結婚し子どもを授かると、子どもをどう育てたらいいか不安になり、私も岡山講座で学び始めました。講義を通してセンターの幼児教育部では「子どもの教育はいついかなる場合も親の自己教育の教材である」のモットーの下に、ゼロ歳から就学前の幼児たちが縦社会をつくり、カリキュラムを持たず、子どもたちが自分たちで考えて一日過ごし、親たちは子どもたちの姿を通して自分の課題にして学び合う」という話を聞き、私も幼児部に通いたいと思いました。

その後夫の転勤が決まり、四年八ケ月前に岡山から埼玉に引越し、私は念願の幼児教育部に息子と娘と共に通い始めました。

金子理事長が出席された幼児部の話し合いに初めて参加したとき、私は挙手もせず話し始めたことがあり、理事長から「周りをよく見ることですよ」と言っていただきましたが、私は「大人として、礼儀も知らないことが恥ずかしい」と涙になりました。理事長は「自分はできていなきゃダメだと思っていることを発見できたことが大事です」と指導をくださいました。そして、私は日頃何でもできるように見える幼児部の先輩と比べ卑屈になっていましたが、先輩方から「貴女は唯一無二の存在なんだよ。自分をそのまま認められるといいね」と言ってもらい、そうなりたいと思いました。幼児部のなかで、自分の気持ちを出せない私に先輩が「今、何を思っている?」と関わってくださり、徐々に気持ちが見えて、ありのままの自分を認められるようになっていきました。

昨年の三月、息子は幼児部を修了し小学校に入学しました。その後、再び夫の転勤が決まり、岡山に戻り夫の九十代の祖父母と同居することになりました。昨年末、家族で一時帰省する前日、息子が嘔吐を繰り返して心配になりました。理事から「転校することをI君はどう思っているのかしら。言葉にならない気持ちを吐き出しているのではないかしら。小田さんはI君をわかるために日頃から気持ちを聞いている?」とおっしゃっていただき、息子をわかりたいと思い、気持ちを聞くと「転校は嫌だ。もっとみんなと遊びたい」と泣きながら訴えました。「本当にそうだよな」と思いを受け止めると息子の嘔吐は止まり、皆で帰省できました。私が息子の気持ちをわかろうとすることでこんなにも変わるのだと実感しました。またある日、夫から「最近、話を聞いてくれるようになった。以前は家に帰りたくなかった」と言われ、私が何でもやってあげているから、夫は好きなことができる。私は、周りのことも気遣えると思っていたのでショックを受けました。そのことから先輩に「自分の思いだけでやっている」と言ってもらい、自分が思っている自分との違いを知り驚きました。

岡山へ戻る前、同居をしたら祖父母の役に立てると幼児部で話すと、先輩から「祖父母との同居は大変だよ。住まわせてもらうという謙虚さを感じない」と言ってもらい、相談もせずリフォームを考えていた勝手さを指摘してくれ、反省になり祖父にお詫びをすることができました。

祖父母と暮らし始め、持病を持つ祖父の介助をさせてもらいました。五月末、祖父は体調が急変し亡くなりました。生前の祖父の意向で家族葬にしましたが、多くの方がお別れに来てくれて、祖父の人望の厚さを知り尊敬になりました。

今、岡山からオンラインで全国講座と、本部の幼児部の読書会に参加しています。これからも相手を知る努力と自分をわかってもらう努力を課題に学びたいと思います。

訃報
デニス・ロートン教授

二〇二二年六月二四日、ロンドン大学（現ＵＣＬ）教育研究所元学長、元同研究所カリキュラム研究教授であり、当センター名誉会員のデニス・ロートン教授が逝去された。享年九十一歳。

イギリス中等教育学校で英語と歴史の教鞭をとられた教授は、一九六三年にロンドン大学教育研究所に教育社会学の研究者として迎えられた。その後さまざまな要職を歴任し、一九八三年から一九八九年まで学長を務められた。

一九八八年、イギリスの教育改革法が成立し、ナショナルカリキュラムが打ち出された。教育に対する国家の介入が強まった状況に対し「普遍的価値と国の文化体系に組み込まれた教育のカリキュラム研究」をされていた教授は、任期半ばで学長の職を辞され、教育現場との繋がりの中で、カリキュラム研究をする学部を作り、研究者としての人生を歩まれたと聞く。

ロートン教授と創設者 野村佳子初代理事長の出会いは、一九八五年、翌年開催予定の第四回生涯教育国際フォーラムの準備のため渡欧した時に遡る。

一九八二年の第三回国際フォーラムに参加された同研究所比較教育学上級講師のヤヌス・トミャック氏から、是非にとのご紹介を受けての出会いであった。

紅茶を供され始まった教授と創設者の懇談は逐次通訳を介して三〇分という短いものであった。

「世界的に人間性が荒廃し、人間性の復活が教育の最も重要な課題になっています。それが私たちセンターの目的となっていて、そのためには地球レベルでの連帯が必要であり、西洋と東洋の接点をつけていくこと、つまり西洋の理性と東洋の感性、文化のルーツの相違点を統合していくことが必要です」と渡欧の目的を話した創設者に、教授は「社会の分解、崩壊の問題を抱えるヨーロッパにとっては、あなたがお話になった統合教育が重要な課題です。しかし、ヨーロッパにとって、それは未開の分野であります」と大きな関心を示された。

1989 年 8 月 奈良ホテルミーティング

一九八九年、「時代と教育」のテーマの下に開催した第二十一回生涯教育全国大会に、創設者はロートン教授とトミャック氏をゲストスピーカーとして招聘した。（年刊誌「生涯教育Ⅲ」参照）

大会後、創設者はお二人を京都、広島、奈良へ招き、野村生涯教育が生まれ出た日本の風土と文化に触れる機会を作った。その締めくくりとして創設者が「奈良ホテルミーティング」と銘した懇談が行われた。

創設者は「今後のより良い交流のためにこの大会参加を通して、お二方が理解し得た点、残された課題などについて話し合いたい」と切り出された。

ロートン教授は「私は今の学問に対して、ちょっと批判的な立場をとっています。学問の世界では、問題を心理学的とか社会学的とかと、わざわざ狭い枠の中に押し込めて、その中でしかものを見たり、考えたり応えたりしていませんから、ミセス・ノムラのように物事を総合的に捉えてはおりません。野村センターでは、それが、

非常にうまくいっているということを感じました」また「参加者が非常に高度な次元で参加意識を持って参加していることがわかりました。そこで、国際社会が最も関心を持って知りたいと思っていることは、ミセス・ノムラの立てられたカリキュラムが具体的にどういうものであり、どうやって人をそのように変え得るのか。そこの点を一番知りたいことです」と述べて「ともかく、カリキュラムについて書かれたものはありますか？　次のフォーラムの時にはそれが必要であると思います」と締めくくられた。

その後、ロートン教授はご自身の書籍を出版されたトレンハム出版社の社主であるジョン・エグルストン教授をご紹介くださり「野村生涯教育原論」の英語版は一九九八年に「Ⅰ」が、二〇〇二年に「Ⅱ」が発刊の運びとなった。

教授は「十五世紀以降現代の西欧工業化社会では、万人が納得し得る新たな『生の哲学』を見出し得ていない。こうした状況に危惧をもったデュルケイムは、『アノミー（規範崩壊）』について言及しています。私はすべての人間が模索すべき普遍的な価値の存在を確信しています。そして、その普遍的価値は、それぞれの社会の伝統的な文化、歴史に統合されるべきだと思う」と、後任学長のピーター・ニューザム卿と共に「原論」英語版出版にあたり、英国読者の理解の助けになるように、と連名での「前書き」を寄せられている。

創設者は渡欧のたびに、必ずロートン教授を訪ね、懇談を重ねられた。一九九〇年の第五回国際フォーラム教育の分科会での「ルネッサンスはまだ完結していない」という参加者の発言に対して、ロートン教授は「ルネッサンスを完結するためには文明史的転換が必要である。今まで、西欧は科学的合理主義ですべてが解決できると信じていたが、しかし今西欧は行き詰っている。野村センターは我々が立ち返るべきその領域を扱っている」と発言された。以来、教授と創設者の懇談のテーマは「ルネッサンス完結への道」についてであった。お二人はいつも、互いに善き論客を得たかのような対話のひと時を楽しまれていた。

2010 年 6 月 ロートン教授のご自宅にて
ロートン教授ご夫妻　金子理事長　木村理事

創設者の逝去後、金子理事長は二〇一〇年六月、ロンドン郊外の自宅にロートン教授夫妻を訪ねた。同年秋の第十回国際フォーラムの準備と「原論」ブルガリア語版の発刊記念式をソフィアで行うための訪欧であった。「原論」英語版があればこそのブルガリア語版発刊であることを、ご尽力くださった教授に改めて感謝と共に報告を兼ねての訪問であった。

手入れのいき届いたイングリッシュガーデンのテラスで、奥様お手製のランチをごちそうになりながら、教授と創設者が重ねられた交流のお話がはずんだ。

最後に、教授は金子理事長に次の言葉を送った。

「ミセス・ノムラは、物質的価値観からの脱却を言われ、常に精神性を重んじられていました。未だに世界はそこから抜け出せずにいるだけに、今後、あなたにとても期待します」と。

また、「私を研究の道に心置きなく進ませてくれたのは妻のおかげなのです」と心からの思いをお話されたロートン教授の言葉を聞く奥様は静かな笑顔でいらした。

デニス・ロートン教授のご厚情に対し、深い弔意を込めて、追悼の記としたい。